

意図的語彙学習のための方法と教材

——人物を表す接尾辞を例にして——

山下喜代

キーワード

意図的語彙学習・接辞データベース・人物を表す接尾辞・教材化

1. はじめに

言語学習において、語彙を学ぶことの重要性は疑う余地のないことであろう。しかし、日本語教育において、学習者の自習は別として、語彙学習が独立して意図的、体系的に進められることは少ない。技能別の指導や教材の中で、たまたま出現した語彙を付随的に学習することが圧倒的に多いと言えるだろう。しかし、このような方法が、語彙学習として、非効率的であることは否めない。中・上級レベルの学習者に対しては、既習の学習語彙を互いに関連づけ、その体系性に気づかせることによって知識を確かなものにでき、また新たな語彙習得にも結びつけていくことができる。

本稿では、語の構成要素である接辞を体系的に学び、その知識を合成語の習得に役立てる方策を考察する。特に、中・上級レベルの学習語彙では漢語がその中心になる。漢語の中でも造語力の高い漢語接辞を体系的・意図的に学ぶことによって語彙力は飛躍的に拡大することが期待できる。接辞を学び、それらの知識を合成語の学習のためのストラテジーとして役立てようとするものである。

以下では、まず、意図的語彙学習と付随的語彙学習について概観する。

次に、取り上げる接辞について述べ、その資料となった接辞データベースを紹介する。そして、中上級学習者の意図的語彙学習の方法とその教材化について述べる。

2. 意図的語彙学習と付随的語彙学習

語彙学習は、意図的学習 (intentional learning) と付随的学習 (incidental learning) に分けて考えることがある。意図的語彙学習は語彙の学習を目的とする直接的学習であり、付随的語彙学習は読解や聴解など語彙学習以外の学習を通して副次的に語彙の習得がなされる間接的学習である。Nation (2005, p270) は、文脈からの推測を通して行われる付随的語彙学習は、意図的で直接的な語彙学習に対置するものではなく、それぞれがお互いから受ける学習を促進する補完的な教育活動であるとしている。そして、文脈に基づく学習でも、そのメッセージに焦点を当てるのが付随的語彙学習で、言語項目に焦点を当てるのが意図的語彙学習であると述べている。つまり、両者は文脈の有無によって区別されるものではないということである。意図的語彙学習と付随的語彙学習についてはその有効性についてそれぞれに批判もあり、どちらが優れているというものではなく、Nation が指摘するように補完的な活動と言えるだろう。しかし、日本語の語彙学習の現状では、教室活動において意図的・体系的語彙学習が行われることは少ないのではないかと思われる。読解活動において、新出語彙に注目してその意味や用法を学ぶことはあるだろう。しかし、語彙を体系的に、時間をかけ、継続的に学習するということはまれなのではないか。初級レベルにおいては身近な挨拶言葉や教室用語、あるいは基本的な動作動詞や形容詞等の語彙リストを示して、それを集中的に学習することがある。そのような学習は意図的語彙学習と言えるだろう。しかし、中上級レベルの語彙学習はほとんどが付随的学習である。文脈に基づく語彙学習の必要性は認めるとしても、付随的語彙学習は学習者が学びたい語彙を必ずしも学習できないという点で問題がある。また英語を対象とした研究によ

るものだが、Nation (2005, p275-279) によると、文脈から語彙を習得していくためにはかなり大量のリーディングをすることが必要になるとい
う。その点でも効率的ではない。Nation (2005, p352) では、語彙の直接的
学習の価値として以下の点を挙げている。

- (1) 時間と努力への見返りに関して効率的であること。
- (2) 学習者に、文脈や辞書使用からは容易に獲得されない単語知識の側面
に意識的に焦点をあてること。
- (3) 学習者が学習を確実にするように語彙の反復と処理をコントロールさ
せること。

日本語の語彙学習においてももっと意図的・体系的な語彙学習が重視さ
れるべきではないだろうか。

なお、本稿では「意図的・体系的語彙学習」の意味で、「意図的語彙学
習」という表現を使用することにする。

3. 意図的語彙学習の方法

意図的語彙学習の方法としては、キーワード法¹⁾の有効性が指摘されて
いるが、他にも様々な方法がありうるだろう。その全体について述べるこ
とは筆者の力の及ぶことではないので、以下では本稿に関係するものとし
て、「意味的まとまりを活用する方法」「語彙リストを活用する方法」「単
語カードを活用する方法」を取り上げる。

1) 単語を記憶する際の方法として古くから行われているものである。キーワ
ード法の語彙学習は二つのステージで構成される。第1ステージは学習しよう
としている外国語の単語と音韻的に似ている母語の単語を思い浮かべる。そ
して第2ステージで、その音の似ている母語の単語をキーワードとして、学
習する語とそのキーワードを結びつける視覚的イメージを心に描くというも
のである。投野 (1997, p63) によると、このキーワード法には、バリエーシ
ョンがあり、例えば、日本人学習者がangerという英単語を覚えるとき、
angerと音のよく似た「案外」という日本語をキーワードとして「案外、怒
らせるのは難しい」といった語呂合わせの文を作って意味を記憶する方法な
ども含まれる。

3.1 意味的まとまりを活用する方法

この方法は、語彙を意味的、音韻的、文法的に類似しているものでグルーピングして学習者に提示する方法である。例えば、語彙を「植物」「動物」などのように意味分野別に提示したり、「右」という新出語を提示する時に、一緒に反義語「左」も導入するというやり方である。このような方法について投野（1997, p70）は「意味的に関連のある語をまとめて導入することは、意味的な干渉や混同が起きやすく、今までの研究を踏まえると、あまり効果的とは言えないかもしれない」と述べている。しかし、一方で「単語の導入にはあまり効果的ではないかもしれないが、単語の復習や定着の段階で意味別分類がどのような影響を与えるかに関する研究はほとんどされていない」としている。門田（2003, p272）ではこの点について「干渉を避けるには、初級の学習者にはセットにしないで、別々に教えることである。ペアにして教える場合には、一方の語を良く知っている語にし、新出語と組み合わせれば干渉を避けることができる」と述べている。

一方、望月（2003, p138-9）は、英語教育の立場から述べたものであるが、教科書の使用語彙を分析した結果、必ずしも高頻度の語彙でテキストが書かれているとは限らないことから、トピック別や頻度順の直接的な語彙学習の必要性を指摘し、その代表的な教材を紹介している。その中で、同じトピックの単語をまとめて学習することにより、語連想によるネットワークの構築がより容易になるとしている。

3.2 語彙リストを活用する方法

投野（1997, p88）は語彙リストについて「外国語学習において、語彙リストは教師にとっては教材選択や教材提示の順序を決定する上で、また学習者にとっては語彙学習の目的を明確化し、最小限の時間で有効な語彙を記憶するうえで、非常に重要な位置をしめる」と述べている。また、Schmitt（2000, p134）では、語彙学習ストラテジーのリストが提示されて

いるが、その中で語彙リスト（単語リスト）を利用することを「一度出会った語の記憶保持を強化するためのストラテジー」の一つとして挙げている。

実際に様々な目的で語彙リストが作成されており、近年はコーパスに基づく頻度表を利用した語彙リストの作成も可能になってきた。すでに現在出版されている学習英英辞典は現代英語のコーパスに基づいて作られているという（投野 1997, p90）。

語彙リストを教材として利用する学習方法は、目標言語と訳語が示されたリストを丸暗記することを想像しがちだが、それだけではないだろう。先に述べた語彙項目のグルーピングと関連づけ、頻度調査に基づき語彙リストを作成し、それぞれの語について、発音、意味、用法などの情報を加え、導入、定着や応用のためのタスクや練習問題を加えたような語彙リストを発展させた教材も可能なのではないだろうか。

3.3 単語カードを活用する方法

Nation (2005, p353-356) は「単語カードから学習することは、焦点をあてた意図的学習を通して語彙サイズを素早く増やす方法である」と述べている。そして、これまでの単語カードによる学習に関する研究成果を踏まえて、「単語カードストラテジー」を2段階に分け、以下のような具体的な方法を提示している。

第1段階：学習するのに適切な単語を選ぶ。優先度は高頻度語とする。干渉を避けるため、形式的に類似している、同じレキシカル・セットに属す、または同義語や反意語、自由連想で似た単語が一緒にならないようにする。

第2段階：単語カードを作成する。持ち運びに便利のように小さなカードにする。想起を促すように片面に単語を、反対側に意味を書く。単語は単独ではなく、文章の中で書かれても良い。意味は第1言語を使用する。可能なら絵を使用する。

また、カードを単純にすることが良いとして、コロケート、語源、制約、文法的パターンなど他の種類の情報を単語カードに書くことはできるが、単語カードは単語を学習することの蓄積過程の1ステップにすぎないとみなし、このストラテジーだけからあまり多くを期待しないのが良いとも述べている。

単語カードによる学習は、教科書の新出語彙を習得するためにも利用できる。しかし、例えば学習者の専門や興味に基づき、語彙項目別に頻度調査の結果も加味して語彙リストを作成し、そのリストを基に単語カードを作成して、学習者の自律的な語彙学習に役立てることも可能であろう。

4. 語構成要素「接辞」を用いる学習方法

Schmitt (2000, p134) では、「新しい語の意味を発見するためのストラテジー」の一つとして「接辞（接頭辞、接尾辞）と語根²⁾を分析する」ことが挙げられている。一方、Nation (2005, p308) は英語学習者について「接辞と語根に関する知識には2つの価値がある」として、次のように述べている。「既知の単語や既知の接頭辞と接尾辞に関連づけることにより未知語を学習するのを助け、未知語が文脈から首尾よく推測されたかどうかチェックするために使用することができる。」Nation は接辞や語根を「word parts（単語部品）」と呼んでいる。そして、新しい複合語を学習するための単語部品ストラテジーは「未知語を部品に分ける」「単語の意味に単語部品の意味を関連づける」という2段階からなるとしている(Nation 2005, p325)。また、このストラテジーの前提として学習者は意図的に接辞の意味を学習すべきであると述べている。さらに、接辞が学習された後で、知識の確立を助けるための様々なゲーム形式の教育活動があることを紹介している。

2) 語の構成要素（形態素）は語基と接辞に分けられるが、この章では、Schmitt (2000), Nation (2001) において「roots」と書かれているものを「語根」と表現している。

これらは、第2言語としての英語の語彙学習において述べられていることである。日本語教育において、特に意図的に接辞についての学習をして、その知識を語彙習得のストラテジーとして積極的に活用していこうという主張は多くない。その中で、山下（2004）、（2005）、（2006）では、漢語接辞の学習が日本語の語彙習得において重要であること主張している。山下（2004）は、学習漢語接辞の選定にとって、語彙項目のグルーピングが有効であるとの認識から漢語接辞の分類を示している。また、その中で特に漢語接辞を扱った教材について述べているが、それによると語彙テキストではオノマトペや慣用句を取り上げたものが多く、接辞（漢語接辞）を扱ったものは多くない。山下（2005）は、漢語接辞の学習のために役立つ『漢語接辞用法辞典』についてその構想を述べ、記述のモデルを示している。

日本語教育においてもこのような接辞に注目した語彙学習についての研究がもっと盛んになることが期待される。また、その一方で、そのような接辞の知識をストラテジーとする学習方法の有効性についても検証される必要があるだろう。

5. 人物を表す接尾辞

5.1 接辞データベース

山下（2005）では、学習漢語接辞選定のために、『三省堂国語辞典第4版』（1992）から抽出した795の漢語の接辞と造語成分を基にして、それらのデータを漢語接辞と一括し、データベースを作成した。795の漢語接辞の内、195が接頭辞、561が接尾辞で、39が接頭辞・接尾辞の両方になるものである。データベースでは、それぞれの接辞について意味分類を示している。この分類は、類義や反義など、何らかの意味の関係によってなされたもので、学習漢語接辞として教材化を考える上で必要であるとしている。しかし、分類は便宜的なものであり、すべての接辞が一つの範疇に収まるものではないとも述べられている。その分類項目は、接頭辞「形

容・指定・待遇・作用・否定・その他」, 接尾辞「人物・具体物・時間・空間・様相・数量程度・類別・精神・待遇・行為・助数詞」である。表1は、分類の結果を山下(2005)から引用して示したものである。

5.2 人物を表す接尾辞

日本語の中で人物に関係する接尾辞はどのくらいあるのだろうか。山下(2005)の漢語接辞データベースの中では「人物」に関係するものは68で、接尾辞全体の11.3%に当たる。さらに「待遇」に分類されている接尾辞

表1 漢語接辞の分類と語数

意味	語数 (百分比)	接頭辞の例
形容	108 (46.2)	新～・旧～ 悪～・好～ 硬～・軟～ 真～・正～
指定	45 (19.2)	同～・本～・当～ 前～・先～ 次～・来～ 他～・別～
待遇	6 (2.6)	御～・貴～・拙～ 権～・従～
作用	45 (19.2)	増～・減～ 帰～・渡～ 滞～・駐～ 離～・脱～
否定	7 (3.0)	不～・無～・非～・未～
その他	23 (9.8)	私～・自～ 地(ち)～・地(じ)～ 数～・十数～
合計	234 (100.0)	
意味	語数 (百分比)	接尾辞の例
人物	68 (11.3)	～人・～者・～家 ～員・～官・～士・～師・～職
具体物	119 (19.8)	～品・～物 ～材・～料 ～器・～機・～計
時間	25 (4.2)	～後・～前 ～時・～期・～節 ～年・～月・～日
空間	101 (16.8)	～所・～場・～地 ～上・～下 ～中・～内 ～苑・～園
様相	24 (4.0)	～的・～風・～式 ～流・～調 ～状・～様
数量程度	32 (5.3)	～度・～回 ～費・～代・～料・～賃 ～強・～弱
類別	11 (1.8)	～系・～類・～種・～群 ～層・～級・～別
精神	37 (6.2)	～観・～感 ～心・～気 ～案・～法・～策
待遇	19 (3.2)	～氏・～君 ～翁・～老 ～坊・～嬢・～兄・～尊
行為	49 (8.2)	～視・～化 ～製・～産・～作 ～発・～着
助数詞	115 (19.2)	～個・～件・～名・～枚・～台・～軒・～冊・～本
合計	600 (100.0)	

の中で人に関係するものとして18の接尾辞があるが、それを加えると86になり、接尾辞全体の14.3%になる。本稿では国語辞典に基づく山下(2005)のデータベースでは接辞や造語成分として扱われていない漢語接辞「～隊(たい)・～達(たち)・～班(はん)・～番(ばん)・～役(やく)」と、さらに和語の接尾辞「～係(がかり)・～方(がた)・～子(こ)・～手(て)・～人(びと)・～者(もの)・～屋(や)・～様(さま)・～殿(どの)・～さん・～ちゃん・～等(ら)」, 外来語「～マン」を加えて104の接尾辞を人物に関係する接尾辞として取り上げることにする。追加した18の接尾辞は「～がかり・～がた・～びと・～マン」を除き、全て『日本語能力試験出題基準』の語彙表に収録されているものである。

本稿ではこの104の接尾辞を「集団・職業・人物・性別親族・組織・役割身分・待遇」の7分野に下位分類した。結果は表2のとおりである。なお、本稿末に104全ての接尾辞分類表を資料として提示した。

これらの分類は、例えば「～手(運転手・交換手)」を「役割身分」に分類したが、「職業」とも捉えることができる。また、「～人(にん)」も「役割身分」に分類したが、「弁護士・保証人」などは当てはまるにしても、「苦労人・通行人」の場合は「人物」に分類したほうが適切とも思われる。その点で、この分類は厳密なものとは言えず、あくまで便宜的なものである。

表2 人物を表す接尾辞の分類と語数

分類	語数 (%)	接尾辞の例
集団	13 (12.5)	～衆(旦那衆)・～陣(報道陣)・～勢(徳川勢)
職業	14 (13.5)	～工(機械工)・～員(会社員)・～医(内科医)
人物	20 (19.2)	～人(経済人)・～魔(収集魔)・～犯(知能犯)
性別親族	15 (14.5)	～子(第一子)・～女(修道女)・～婦(炊事婦)
組織	5 (4.8)	～協(〇〇連絡協)・～労(地区労)・～委(共闘委)
役割身分	17 (16.3)	～手(運転手)・～相(国土交通相)・～補(警部補)
待遇	20 (19.2)	～君(山本君)・～御前(母御前)・～氏(中村氏)
合計	104 (100.0)	

分類の結果では、人名や官職名の下に敬意を添加する接尾辞のグループである「待遇」と、どのような人物であることを示す接尾辞のグループ「人物」が最も多い。「人物」を示す接尾辞は「～犯（窃盗犯）・～狂（マージャン狂）・～漢（熱血漢）・～魔（収集魔）」など各々の接尾辞が明確な意味を示すものがある一方で、「～者（もの）・～者（しゃ）・～人（びと）・～人（じん）」など、それぞれの接尾辞の使い分けが学習上で問題になりそうなものもある。次に続く「役割身分」「性別親族」「職業」「集団」のグループは数の上では差がない。「役割身分」の接尾辞には「～手（ラッパ手）・～番（電話番）・～役（進行役）」「～主（りんご園主）・～帝（明治帝）・～長（書記長）・～補（警部補）」などがあり、前者は「役割」、後者は「身分」を表す接尾辞と区別できるが、ここでは同じグループにした。特にこのグループの接尾辞は「職業」に分類したものと違いが明確ではないものもある。「性別親族」は「～兄（佐藤兄）・～妹（異母妹）・～老（石橋老）・～児（肥満児）」など「兄弟姉妹、老若男女」を表す接尾辞のグループである。また、このグループに入れた「～婦（炊事婦）・～夫（炭鉱夫）」などは「職業」とも言える。「職業」に分類したものでは「～士（弁護士）・～師（調理師）」などは、「看護士・看護婦」が「看護師」に統一されたが、学習上使い分けが問題になるだろう。「集団」は「～衆（だんな衆）・～勢（東京勢）」「～族（転勤族）・～民（避難民）」など現在ではその造語力にかなり差があると思われるものもある。また意味的な違いも問題になるだろう。「組織」のグループは「～協（〇〇連絡協）・～裁（最高裁）」など省略形が主なものである。

このように分類する目的は、学習項目としての接尾辞を選択するうえで、共通する意味分野に属するものにどのような接尾辞があり、その中で、学習項目としては何が重要であるかを判断するために必要と考えるからである。また、接辞を核とする意図的、体系的語彙学習のための教材を考える上で必須の作業と言えるからだ。しかし、これらの接尾辞について個々に分析するにあたっては、共通する分野の接尾辞を取り上げることも重要だ

が、分類が多分に便宜的なものであるため、分類を越えて分析することも必要となるだろう。さらに、学習項目として取り上げる接尾辞を選定するためには、その使用頻度や造語力についても調査や検討が必要になる。ちなみに、104の接尾辞の内『日本語能力試験出題基準』の「1・2級語彙表」に収録されているものは、接尾辞とは限らずに語として収録されているものを含めて40である。104の接尾辞の中には、日本語学習で基本的な接辞とは言えないものも含まれているし、また、現代語としては使用が限定されるものもあると言える。さらに、頻度調査などに基づき、重要な接辞の選別が必要である。

6. 人物を表す接尾辞の学習方法と教材化

『日本語能力試験出題基準改訂版』に採録されている接辞だけでも152あることから、山下(2005)では、接辞を教材化するには辞書という形が最もふさわしいとして、『漢語接辞用法辞典』を構想し、その内容と記述例を提示している。辞書は言語学習に必須のものである。しかし、本稿では、中上級日本語学習者の意図的語彙学習のための方法と、辞書とは異なる教材について考えてみたい。

先に述べたように、意図的語彙学習の方法としてその効果についてはさまざまな意見があるが、本稿では「語彙項目のグルーピング」「語彙リスト」をキーワードにして、語構成や意味的關係に注目した教材について考え、それに関連して学習方法についても述べたい。

まず、語彙項目によって分類された語彙リスト形式の教材を考えると、各々の語彙リストを学習者の必要性や興味によって選択できないかわゆる「リソース型教材」が想定できる。また、そのような語彙リストを集めた「語彙リスト集」という形式でも、学習者にとって必要なリストだけを選択して使用することができる。このような「語彙リスト集」の教材例としては『外国学生用日本語教科書 分野別用語集』(1996)がある。ここではこの教材をモデルにして、改善点を述べる形で、話を進めることにする。

6.1 意図的語彙学習のための教材『分野別用語集』

『分野別用語集』は、「食事・衣服・住居・政治・経済・法律・動物・植物」など語彙をトピックによって30の分野に分けて示したテキストである。取り上げられている見出し語は7389語であり、慣用句を含めると8500語が収められている³⁾。分野ごとに、トピックと結びつく見出し語とともに、意味的あるいは語構成的に共通する語や句、類義語や反義語などをさまざまなレベルでグルーピングして体系的に示したものである。必要な語には短文による用例を挙げ、理解を助けるためにイラストが示されているものもある。体系的に作成された語彙リストに近いものと言える。

山下(1999)は、この『分野別用語集』を使用した授業の報告である。これは日本語の上級レベルの学習者による意図的語彙学習についての報告と言える。そこでの学習者自身の学習内容や方法についての評価は概ね好評であった。評価は授業終了後に質問紙調査をした結果によるが、『分野別用語集』を使用した授業については、9名中7名の学習者が語彙力の向上に役立ったと肯定的に捉えている。ただし、この教材の問題点として指摘されたことは、「語数が多すぎること」「テキストに意味についての情報がないこと」「練習問題がついていないこと」等であった。毎回分野ごとに学習した後でテストを課したことが良い点として評価されていた。テスト形式にせずこのテストを練習問題として使用することもできたと思う。この質問紙調査は、客観的に語彙習得の成果を検証したものではないので、この結果を一般化して語彙項目のグルーピングによる提示が効果的であるとは言えない。しかし、上級レベルの学習者には知識を整理し、語彙を体系化するのに効果があったのではないと思われる。必要な改善点としては、使用頻度に基づく学習語彙の選別、訳語などをつけることによって意味理解を助ける方策、練習問題の提示などが挙げられる。

3) 『分野別用語集』の語彙構造については、野村・山下(1998)に詳しい報告がある。

6.2 人物を表す接尾辞の教材化

教材化にあたって必要な学習接尾辞の選定とその分類は先に述べた。しかし、学習語彙項目としては不必要なものもあるようなので、重要度によってさらに絞り込む必要がある。問題は重要度の判断基準が明確ではないことだ。一つの目安として『日本語能力試験出題基準』に採録されているかというものがある。しかし、本来は広く使用頻度を調査した結果も判断の資料とするべきであろう。今後、日本語のコーパスなどを使用した頻度調査を行う予定である。

以下では教材の内容と構成について概略を述べる。

1) 教材の内容は以下の項目からなる。

① 意味分類した接尾辞のリストとその合成語リスト

(例えば、人物を表す接尾辞の場合は、「集団・職業・人物・待遇」等に分類したものである。)

② 接尾辞と合成語の読み

③ 接尾辞と合成語の意味 (英訳等)

(意味の説明は上級者向けには平易な日本語のほうが良いと思われる。しかし、これまでの研究では語彙リストや単語カードを使用した場合、第1言語の訳が示されている方が記憶保持のためには効果があることが報告されている (Nation 2005, p354)。

④ 練習問題やタスク

2) 構成は①を表のページに、②③をその裏のページに示す。この①から③の部分が語彙リストにあたる部分である。別のページに④を載せる。(①の日本語の接辞リストと③の訳を見えないように裏表にするのは、これまでの研究で単語リストを使用した学習において、第2言語と第1言語を同時に提示する方法では、第1言語の単語に注意が向いてしまい第2言語の単語を覚える際に、第1言語の単語に阻害されてしまうことが報告されているからである (谷内 2002, p157)。

教材に接辞を含む合成語の例を示す場合、その合成語の重要度も考慮す

る必要がある。例えば『日本語能力試験出題基準』の語彙表では取り上げられている合成語はごく一部である。『分類語彙表（増補改訂版）』ではかなり合成語が採録されている。そのような資料に基づき合成語の重要度を判断したり、日本語コーパスを用いた頻度調査をする必要もあるだろう。

また、必要なら、合成語を含む例文を載せたほうが良いと思うが、文脈での理解は練習問題を考える中でも可能であろう。

練習やタスクはリストによって接辞を学習した後で、その知識を定着させるための練習である。いわゆる練習問題の他にゲーム形式の練習も考えられる。Nation（2005, p326）では、そのようなゲームとして「単語作成と単語取り」「分析活動」を挙げている。単語作成と単語取りは接辞と語基が別々に書かれたカードを使用して、学習者がそれを結合して合成語を作成するゲームである。また、分析活動は学習者に単語を部品に分解させ、似通った部品で単語をグループ化させ、部品と意味を組み合わせるゲームである。

このようなゲームは日本語の接尾辞の練習にも応用できる。例えば、分析活動では「観光団・消防団・救助隊・探検隊・小説家・法律家・会社員・銀行員・消費者・賛成者・働き者・慌て者」などの合成語を接尾辞の意味によって「集団」「職業」「人物」の三つにグループ化する活動等である。この場合、接尾辞の分類があまり細かいと学習者にとっては難しくなる。先に行った人物を表す接尾辞の分類は一つの例であって固定的なものとして考えるべきではないだろう。

また、クラス活動においては④の練習やタスクはペアやグループで行うのも良いだろう。

さらに、未習語が多い学習者は、自習用として、このリストの合成語の単語カードを作成して使用することも効果的と思われる。

7. おわりに

本稿では、主に英語教育における語彙習得についての先行研究を参考に

しながら、日本語教育における意図的語彙学習の必要性を述べた。また、英語学習でよく用いられている接辞の知識を語彙習得に生かすストラテジーを参考にして、日本語教育に応用する方法を考察した。そして、接尾辞についての知識を身に付けた上で、その知識を合成語の習得に利用するための教材化について検討し、その構想を述べた。しかし、教材についてはその概要を示すに留まり、具体的な教材のサンプルを提示するまでには至らなかった。今後の課題としたい。

参考文献

- 門田修平 (2003) 『英語のメンタルレキシコン 語彙の獲得・処理・学習』(松柏社)
- 国際交流基金 (2002) 『日本語能力試験出題基準改訂版』(凡人社)
- 国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表増補改訂版』(大日本図書)
- 投野由紀夫 (1997) 『英語語彙習得論 ポキャブラリー学習を科学する』(河源社)
- 野村雅昭・山下喜代 (1996) 『外国学生用日本語教科書分野別用語集』(早稲田大学日本語研究教育センター)
- 野村雅昭・山下喜代 (1998) 「外国学生用日本語教科書『分野別用語集』の語彙」(『講座日本語教育』33 早稲田大学日本語研究教育センター)
- 望月正道他 (2003) 『英語語彙の指導マニュアル』(大修館書店)
- 谷内美智子 (2002) 「第二言語としての語彙習得研究の概観：学習形態・方略の観点から」(『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化研究会)
- 山下喜代 (1999) 「読解力・文章表現力向上のための語彙教育—外国学生用日本語教科書『分野別用語集』を使った授業の試み—」(『講座日本語教育』34 早稲田大学日本語研究教育センター)
- 山下喜代 (2004) 「日本語教育における語彙指導—字音接辞の指導を中心として—」(『青山語文』34号 青山学院大学日本文学会)
- 山下喜代 (2005) 「日本語学習のための辞書—漢語接辞用法辞典の構想」(『早稲田日本語研究』14号 早稲田大学日本語学会)
- 山下喜代 (2006) 「中国人日本語学習者の漢語習得—日中漢語接辞を中心にして—」(青山学院大学文学部『紀要』47)
- Nation, I.S.P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language*, Cambridge University Press (吉田晴世・三根浩訳 (2005) 『英語教師のためのポキャブラリーラーニング』松柏社)
- Schmitt, N. (2000) *Vocabulary in Language Teaching*, Cambridge University Press

資 料

人物を表す接尾辞分類表

	接尾辞	よみ	基準	分 類	語 例
1	～衆	しゅ		集団	子ども衆・だんな衆
2	～衆	しゅう	有	集団	六人衆・男衆
3	～陣	じん		集団	報道陣・教授陣
4	～勢	ぜい		集団	徳川勢・東京勢
5	～族	ぞく		集団	団地族・社用族
6	～隊	たい	有	集団	探検隊・捜索隊
7	～達	たち	有	集団	子供たち・男たち
8	～団	だん	有	集団	観光団・議長団
9	～等	ら	有	集団	子供等・あいつ等
10	～同士	どうし	有	集団	女同士・敵同士
11	～班	はん	有	集団	捜査班・研究班
12	～方	がた		集団	あなた方・皆様方
13	～民	みん		集団	避難民・居留民
14	～医	い		職業	内科医・開業医
15	～員	いん	有	職業	会社員・銀行員
16	～家	か	有	職業	小説家・専門家
17	～官	かん	有	職業	行政官・管制官
18	～関	ぜき		職業	琴欧州関
19	～工	こう		職業	機械工・配管工
20	～司	し		職業	保護司・児童福祉司
21	～士	し	有	職業	栄養士・弁護士
22	～子	こ	有	職業	売り子・お針子
23	～師	し	有	職業	指し物師・浪曲師
24	～商	しょう	有	職業	貿易商・雑貨商
25	～職	しょく	有	職業	管理職・たため職
26	～農	のう		職業	自作農・小作農
27	～吏	り		職業	税関吏・官吏
28	～マン	まん		人物	カメラマン・ジャズマン
29	～王	おう	有	人物	ホームラン王・石油王
30	～屋	や	有	人物	やかまし屋・物理屋
31	～漢	かん		人物	熱血漢・門外漢
32	～鬼	き		人物	殺人鬼・吸血鬼
33	～居士	こじ		人物	円満居士・慎重居士

34	～狂	きょう		人物	マージャン狂・野球狂
35	～傑	けつ		人物	打撃十傑
36	～自身	じしん	有	人物	きみ自身・自分自身
37	～者	しゃ	有	人物	賛成者・消費者
38	～者	もの	有	人物	慌て者・不屈き者
39	～人	じん	有	人物	日本人・経済人
40	～人	びと		人物	尋ね人・旅人
41	～世	せい		人物	ロックフェラー三世
42	～哲	てつ		人物	十哲
43	～盗	とう		人物	介抱盗
44	～犯	はん		人物	知能犯・殺人犯
45	～坊主	ぼうず		人物	のんき坊主・一年坊主
46	～魔	ま		人物	収集魔・電話魔
47	～浪	ろう		人物	二浪
48	～翁	おう		性別親族	福沢翁
49	～兄	けい		性別親族	異母兄・佐藤兄
50	～姉	し		性別親族	清水(久美子)姉・同母姉
51	～子	し		性別親族	編集子・短評子
52	～児	じ	有	性別親族	肥満児・革命児
53	～女	じょ	有	性別親族	千代女・修道女
54	～嬢	じょう	有	性別親族	春子嬢・交換嬢
55	～親	しん		性別親族	尊属親
56	～男	なん		性別親族	二男一女・三男和雄
57	～弟	てい		性別親族	異母弟
58	～夫	ふ		性別親族	掃除夫・潜水夫
59	～婦	ふ		性別親族	炊事婦・家政婦
60	～坊	ぼう		性別親族	おつる坊・次男坊・けちん坊
61	～妹	まい		性別親族	異母妹
62	～老	ろう		性別親族	石橋老・八十老
63	～家	け	有	組織	山本家・将軍家
64	～協	きょう		組織	合成ゴム協・〇〇連絡協
65	～響	きょう		組織	ボストン響・N響
66	～裁	さい		組織	最高裁
67	～労	ろう		組織	地区労
68	～さん	さん	有	待遇	田中さん
69	～ちゃん	ちゃん	有	待遇	太郎ちゃん

70	～君	くん	有	待遇	山本君
71	～御	ご	有	待遇	親御・娘御
72	～御前	ごぜ		待遇	尼御前・母御前
73	～御前	ごぜん		待遇	六代御前・仏御前
74	～公	こう		待遇	徳川慶喜公・熊公・与太公
75	～斎	さい		待遇	一刀斎
76	～氏	し	有	待遇	中村氏
77	～丈	じょう		待遇	菊五郎丈
78	～尊	そん		待遇	地藏尊・不動尊
79	～殿	でん		待遇	(戒名につける尊敬した言い方)
80	～殿	どの	有	待遇	山本殿
81	～様	さま	有	待遇	鈴木様・ヨン様
82	～委	い		役割身分	共闘委
83	～監	かん		役割身分	生徒監・寮監
84	～監部	かんぶ		役割身分	幕僚監部
85	～卿	きょう		役割身分	ラッセル卿
86	～係	がかり		役割身分	受付係・配送係
87	～侯	こう		役割身分	島津侯
88	～使	し		役割身分	査察使・遣唐使
89	～主	しゅ	有	役割身分	造物主・りんご園主
90	～手	しゅ	有	役割身分	運転手・ラッパ手
91	～手	て	有	役割身分	引き受け手・やり手
92	～囚	しゅう		役割身分	死刑囚・未決囚
93	～哨	しょう		役割身分	監視哨
94	～将	しょう		役割身分	武田二十四将
95	～人	にん	有	役割身分	苦勞人・当選人
96	～生	せい	有	役割身分	研究生・卒業生
97	～相	しょう		役割身分	運輸相
98	～長	ちょう	有	役割身分	委員長・書記長
99	～帝	てい		役割身分	明治帝
100	～尼	に		役割身分	修道尼・蓮月(レンゲツ)尼
101	～番	ばん	有	役割身分	電話番・店番
102	～補	ほ		役割身分	警部補・主事補
103	～房	ぼう		役割身分	武蔵房
104	～役	やく	有	役割身分	通行役・進行役

* 「基準」は『日本語能力試験出題基準』の採録の有無を示す。